

地名を検索する

——The family vault of Sir James Steuart, Denham——

渡辺 邦博

WATANABE Kunihiro

1. はじめに
2. ヒュームの旧居
3. スミス
4. ジェイムズ・ステュアート
5. リカードとマルサス
6. おわりに

* キーワード：ヒューム、スミス、ステュアート、リカード、マルサス、コント

1. はじめに

本稿は、近年急速に拡大している情報メディア「グーグルマップ」（事実上「グーグルアース」を利用する場合もある）を使って、歴史上に登場する重要人物を追跡する際のツールとして利用できないかを試みた経過・結果である。「グーグルマップ」それ自体が変化進化しているし、個別情報の取り扱いをめぐる環境の変化も十分に考慮しなければならない。その点を留意して考察を進めたい。

最近、アーサー・ハーマン著（篠原監訳・守田訳）『近代を創造したスコットランド人』を全編にわたって繙解く機会に恵まれた。この書物は、300年以上にもおよぶスコットランドの世界文明に対する貢献を、仔細にバランスよく描いた力作であった。その過程で、私の性癖からであろうが、著者の記した年代、個人名、場所、などもすべてではないが、念のために確かめると言った作業も並行して行なったが、利用された文献に再度あたるのは当然として、現地の情報の確認も必要である。以下は、その一例である。

2. ヒュームの旧居

ハーマンの書物の第7章、特に第8章には、代表的なスコットランド人デイヴィッド・ヒューム (David Hume, 1711-76) について、丹念な記述がある。

ヒュームは、エディンバラ大学を出て、最初は商人として生きるべく職業技術を身につけるためブリistolに出るが、すぐにそれを止めてフランスに渡り、フランス流の物の考えを身につけ、帰国後最初に出版した『人間本性論』 (*A treatise of human nature*, 3vols., 1739-40) は、スミスのような理解

者をえたものの、成功した書物とはならず、スタイルを変更した書物を次々と出版して、『政治論集』(Political discourse, 1752)でその名を不動のものとし、エディンバラのオールド・タウンを拠点に、家庭教師、従軍、彼としては唯一の定職＝エディンバラ弁護士図書館長などを歴任したが、1769年に開始されたエディンバラ・ニュータウン計画で開発された区画に新居を定め、スミスの『国富論』の完成を祝った年に永眠した。

ハーマンの書物は、ヒュームのニュータウンでの新居について、それまでのヒューム伝の定本モスナーの伝記¹にさらに情報を付加して、住居を「セント・デイヴィッド・ストリート」、それも「セント・アンドルー広場の北西」と記している。²

確かに、筆者は、ニュータウンのセント・アンドルー広場近くで「ヒューム旧居」の表示を写真に収めたことはあるが、何かおかしい。住居があった通りは、もとはセント・アンドルー・ストリートだったのが、デイヴィッド・ヒュームが住むと言うことで、「セント・デイヴィッド・ストリート」と呼ばれるようになったともモスナーは書いている³が、「グーグルマップ」によってそれを確かめてみた。

作業手順は、以下のようなものである。

「グーグルマップ」を開く。

その上で、「ヒュームの旧居」にジャンプしてみる。

21 St David Street, Edinburgh, UK を「検索ウィンドウ」に入力。

① **Googole** の、Google のマークの横にある白い空欄に

21 St David Street, Edinburgh, UK

と入力して、

② 検索ボタンを押せば、画面の右側が、エディンバラ・ニュータウンの「セント・アンドルー広場」になる。

③ おそらく、ページの左側には上記住所に関連ある候補の複数の情報が出るだろう。探そうとする「ヒューム旧居」の壁ではないかと思われる。

「ヒューム旧居」のプラークを見るには、二つの方法がある。

¹ "It is situated in our new Square, that is, St Andrew Square, one block north of Princes Street". Mossner[1980.] P.562.

² ハーマン [2012]、篠原監訳、180 ページ。" He bought a lot on the norhtwest corner of Andrew Square, one block norrht of Princes Street" . Herman, 原著 [2001], p.174.

³ Mossner[1980], p.620.

④ 第一の方法として、左の情報欄の写真を、マウス右クリックして「新たなページ」を開いておく。第一の方法は、のちに使うので、記憶しておく。

⑤ 第二の方法をまず試みる。右の広場の航空写真をズームインする。写真の左上に、大きなボタンのようなものがあるが、これは矢印の方向に写真をずらすボタン。その下に、ペグマン「黄色い人間が立っているような印」と、プラスとマイナス記号がある。

⑥ プラスを押すと写真がズームイン、マイナスを押すとズームアウトする。

⑦ ペグマン印を使う。この記号をマウスでドラッグして、自分が大きく見たい場所でドロップすると、この場合は、検索した住所を、あたかも自分がその場所にいるかのような写真で見ることができる。「ストリートビュー」と呼ばれるものである。多分、検索した場所に、Aのピン印が入っているので、ペグマン印をドラッグして、Aでドロップする。ある程度ズームインしてからの方が手元が狂わないだろう。画面が、この通り<= St David Street >の街路になるから、画面を左右に動かすと、通りのある地点にいて、目を360度動かしているように写真が動く。

そして、画面の左に「セント・アンドルー広場」が見える辺りの「壁面」に、「セント・デイヴィッド通り21」の「21」が見える建物の二階にズームインしてみると、以下に示す、「1771年から76年まで、ヒュームがここに住んだ」、との文字が見えると思われる。

South St David Street と言う街路表示の見える高さで、その表示のすぐ右の二階の窓、窓の下の枠の高さの右側に三枚のブロックが横に伸びている。その二枚目をドンドンズームインすると、1771年から76年までの表示が見えたら大成功。面倒な場合は、拡大したい場所にマウスを置き、左クリックを繰り返せば、見たい映像が見えるはずである。

⑧ 次に第二の方法。先ほど、④で出して置いたページが、今見ている「グーグル」のページの右上方に、新しいページできているはずである。

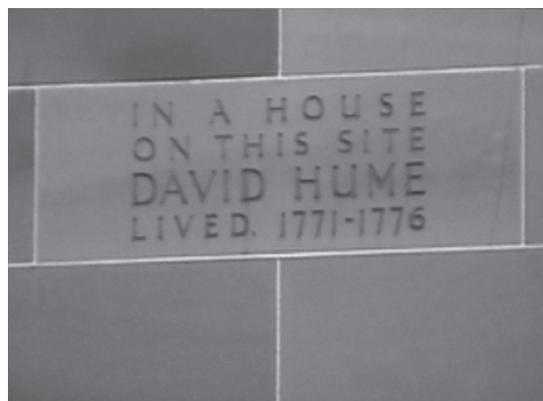
それをアクティブにすると、既に写真を見ておいた場所の「ストリートビュー」画面になっているはず。

⑨ South St David Street の表示を目印に画面を自分が見たい方向なり場所を中心に置き、ズームインする。

⑩ 二階の第一の窓の右のブロックを探し当て、二枚目のブロックにズームインを繰り返し、「1771年から76年まで、ヒュームがここに住んだ」、との文字が確認できれば、同じ結果となったことになる。

通常は第一の方法を利用するが、運が良くて、検索の結果出てきた候補が一つなら、第二の方法が確実ではないか。

下に、筆者が写真に収めた「ヒューム旧居」を示す壁面を参照して頂きたい。「ヒューム旧居」は、「セント・アンドルー広場」の「南西」とするのが正しいと思われる。



<エディンバラ、ニュータウン、セント・アンドルー広場南西に存在したヒューム旧居>

同様に、下記のような経済学史に関連する場所を検索してみよう。

手始めに、ヒュームの友人「アダム・スミス」について、エディンバラで関係する場所を紹介する。

エディンバラには、エディンバラ・オールドタウンの「ロイヤル・マイル」にある「スミスの墓所」=「キヤノンゲイト教会」、同じく保存されることになったスミス終焉の家「パンミュア・ハウス」などもあったが、最近セント・ジャイルズを背景に、スミスが勤務した旧スコットランド税関の前に、観光用であろうが、スミスの立像ができています。

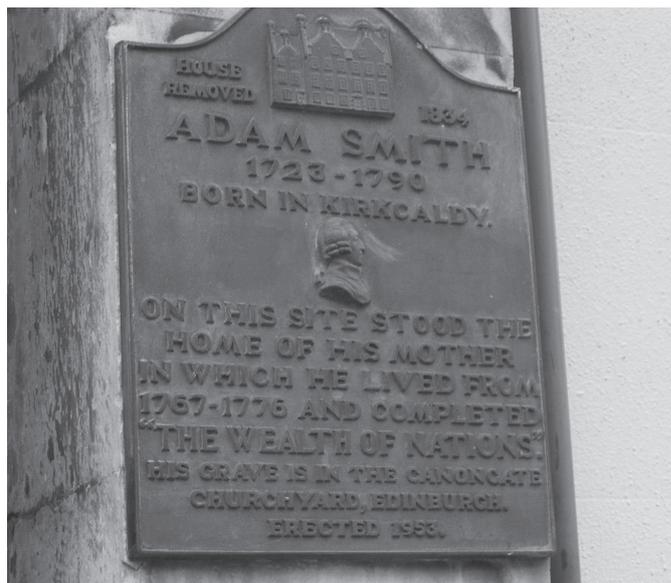


<パンミュア・ハウス>



<セント・ジャイルズ教会を背にしたスミス立像>

その反対にであろうか、スミスの生誕地であり、スミスの母親の住居跡や、スミス研究者には馴染みの「アダムスミス小路」Adam Smith Closeのある、ファイフのカコーディ(Kirkcaldy)には、さすがにスミスの母親の住居跡を示すプラークは残っている。

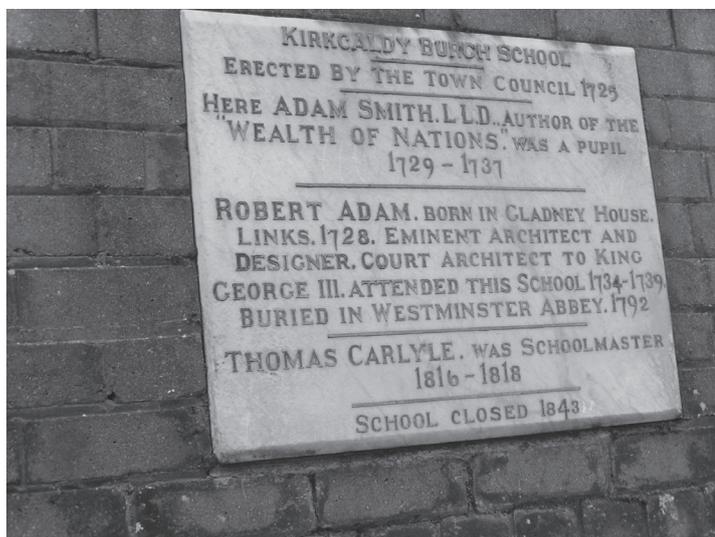


<スミスの母親の旧居を示す表示、カコーディ>



＜『国富論』執筆に疲れたスミスが、海岸に出た路とされる、アダム・スミス小路＞⁴

スミスの卒業した小学校は遠い昔に駐車場となっており、この「グーグルマップ」では、その痕跡を示す掲示板も確認できない。



＜スミスやロバート・アダムなどの卒業した小学校跡、カコーディ＞

そこで、あまり環境変化も少ないと思われるカコーディの郊外にあった、スミスの母親マーガレット・ダグラスの関係地を「グーグルマップ」で調べてみよう。⁵

⁴ 227 High street, Kirkcaldy を検索すると、かろうじて確認できる。

⁵ 「グーグルマップ」、ないし「グーグルアース」は、改訂を繰り返しているのので、ここで使用された「ストリートビュー」も、使用方法が変化している可能性もある。

3. スミス

スミス (Adam Smith, 1723-80) は、その師フランシス・ハチスンの後継者として道徳哲学を担当した。最初の著作『道徳感情論』(*The theory of moral sentiments*, 1759) 出版後、青年公爵バクルーの付添教師として、母校グラスゴウ大学を退職してフランスに随行し、重農学派と交流。帰国後は郷里カコーディに引退し、道徳哲学体系の一環として『国富論』(*An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations*, 1776) をまとめて、ロンドンで出版、時代に大きな影響を与えた。その後スコットランド税関吏となりエディンバラに転居、構想していた法学体系の完成をみないで逝去した。

このスミスは、税関吏であった父親スミスが彼の誕生以前に死亡したため、母親マーガレットの実家で育てられたが、三歳のある日時に母の兄の居城ストラセンリ城の側で遊んでいた折、ティンカーと呼ばれるジプシーの集団に誘拐されそうになり、機転を利かした家人の救出によって、事なきを得たとのエピソードが伝わっている。⁶

筆者などは、この時彼が誘拐されたままであったならば、「経済学」と言う学問は成立しなかったかも知れないなどと聞かされたものである。

ストラセンリ (Strathenry, Strathendry)、スコットランド (レスリー Leslie) を検索すると、A911 と T 字状に交差するストラセンリ・アヴェニューが発見できる。このアヴェニューを北上して、最初の左折路を左折し、数百メートルで、左側にストラセンリ城がある。想像以上に小さな城だが、現在は光学機器を取り扱う経営者の別荘の様なものとなっているらしく、管理人も配置されていた。悲劇のスコットランド女王メアリー・スチュアートが幽閉されたリーブン (Leven) 湖の東方数キロにある。



<いずれも、ストラセンリ城>

スミス所縁のカコーディのあるファイフには、スコットランドでもっとも古い大学のあるセント・アンドルーズや 11 世紀から 17 世紀までスコットランドの首都だったダムファーリン (Dunfermline)、

⁶ Ross[1995], p.18. 篠原久他訳 [2000], p.20.

ここは鉄鋼王と呼ばれたアメリカの実業家アンドルー・カーネギー (Andrew Carnegie, 1835-1919) の出身地でもある、古い歴史を持つ所だが、有名なダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660-1731) の『ロビンソン・クルーソー』に関係する場所もある。⁷

セルカークの旧居は現存しないが、「グーグルマップ」で「スコットランド、ロウアー・ラルゴ Lower Largo」を辿ればそう難しいものではない。「クルーソー・ホテル」近傍を探索すると、その痕跡を求めることができる。ハーバーワインドと、メイン・ストリートの交差点から東に数十メートル行くと、左側にロビンソンのモデルとなった「セルカークの立像」を持つ建物がある。



＜セルカーク立像、ロウアー・ラルゴ＞

次に、ステュアートに移ろう。

4. ジェイムズ・ステュアート

ジェイムズ・ステュアート (James Steuart, Denham, 1713-1780) は、スミスに先立つこと9年ブリテンで始めてポリティカル・エコノミーをタイトルに付した書物『経済の原理』 (*An inquiry into the principles of political Oeconomy*, 1767.) を公刊して、近年では「最初の経済学者」と称されるようになって来てはいるが、スミスに比較するとその生涯も明らかでない。エディンバラ大学卒業後弁護士となり、いわゆるグランドツアーで大陸を歴訪の後、ジャコバイトの反乱 (1745-46) に加担してインگران

⁷ ロビンソン・クルーソーは架空の人物であるが、実際に無人島で生活したスコットランドの航海長アレグザンダ・セルカーク (Alexander Selkirk, 1676-1712) の実話を基にしているといわれる。

1704年10月、航海長をしていたセルカークは、船長との争いが元でマス・ア・ティエラ Mas a Tierra 島に取り残された。マス・ア・ティエラ島は、チリの沖合に浮かぶ全長約20km×幅約5kmの島でファン・フェルナンデス諸島 Juan Fernandez Islands では最も大きい島である。セルカークは4年4ヶ月の間、このマス・ア・ティエラ島で自給自足生活をし、1709年2月に海賊船に助けられた。イギリスに戻ったセルカークの体験談は1713年に出版され、ロビンソン・クルーソーの物語の出版はその数年後のことである。＜この島は1966年に Robinson Crusoe Island と改名。-33.624912,-78.831239＞

高橋大輔 [2010], pp.28-31. も参照。

ド政権の打倒を計ったが失敗、再び大陸諸国で長い亡命生活を送り、63年に帰国、以後は領地コルトネス Coltness に籠って農場経営と執筆に専念した。長期に渡る海外生活の経験から、経済的な先進国ブリテンを、当時後発の途上国であった大陸諸国の目で相対化できたと言われる。1770年台初頭には、イングランド政府や東インド会社から、鑄貨問題での諮問を受けたり、経済の専門家と目された形跡があるが、1776年にスミスの『国富論』が出版されると、イングランド的ではないと評価されて、急速に影響力を失い、失意のうちにこの世を去った。

スキナーの略伝では、「1780年11月26日に没し、キャンバスネサン Cambusnethan の一族の栄堂に葬られた」⁸とある。

既に明らかとなっているのは、チャーマーズの略伝で、息子のステュアート将軍がロンドンのウェストminster寺院に当人を顕彰する碑を建立したことである。⁹

また、スキナーの新たな伝記では、” He was interred in the family vault at Cambusnethan, near Wishaw, in the County of Lanark; the vault is now sadly ruinous.”¹⁰となっている。

1990年代初頭このキャンバスネサン¹¹の、ステュアートの故地キャンバスネサンの中心部にあった大規模な教区教会墓地で、ひとつひとつ墓石を確認する作業をしたが、成果を得ることはなかった。これもかなり前のことだが、山崎怜「キャンバスネイサン」と題するエッセイ¹²を、『小林昇経済学史著作集』Vの葉で読んでことを想起した。教会それ自体が移動していることを放念していたのであった。目的地に達するには正しくオールドチャーチの在処を確定しなければならない。

2004年に、エディンバラで経済思想史会議 HET があった時、東北大学の古谷豊氏がちょうどエディンバラに留学されており、すでにステュアートの墓所に足を運ばれていたとのことで、学会の合間に同行を願った。エディンバラからの車は矢の様に走って、キャンバスネサンの中心部から更に西へ、A721を超え、グラーズゴウからの鉄道も超え、B754も超えて、クライド溪谷に向かう。カークヒル・ロードを南下して、その突き当たりミューアハウス・ファームが見えた。車をそこで降りて、緩やかな斜面を降りる。周囲は農場だが、一画だけが木々の残された荒地となっている。その荒地に、石造りの大きな建造物が朽ちかけて残っている。落書きまでなされているが、一族の栄堂にふさわしい大きなものである。山崎先生の言われた「コルトネス」の「ロングエス」も判読できた。

この「悲しむべきことに、荒涼とした状態」にある「一族の栄堂」を、念のため今回「グーグルマップ」を利用して、所在を検索したが、上空からの衛星写真では、必ずしも「栄堂」vault を鮮明には確認できなかった。以下の場所であろうことを記しておきたい。その場所は、

⁸ Skinner[1966],lvi

⁹ Chalmers[1805], p.387

¹⁰ Skinner [1998], Introduction, lxiii.

¹¹ Cambus とは、本来沿岸部分の湾曲した所に由来し、溪谷などの合流部にも使われるようだが、この場合の川のひとつは、クライド川で、今ひとつがネサン St.Nethan らしい。ミューアハウス・ファームからゆるやかな斜面がクライド川に通ずる。今は消滅しつつあるのかも知れないが、周辺には水路の痕跡も見受けられる。ミューアハウス・ファームの南西のクライド川には、確かに bend 湾曲が存在する。Darton[1990].

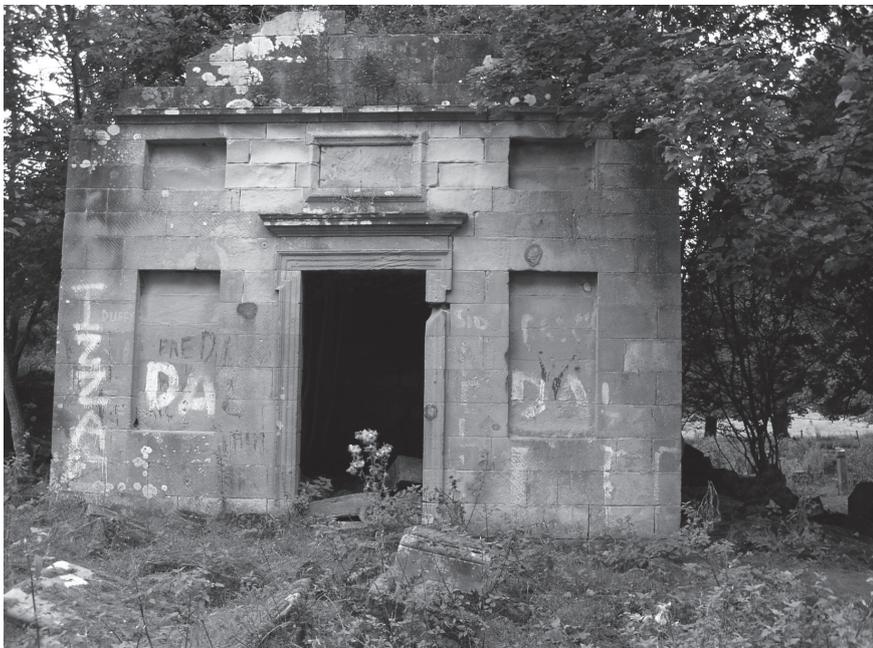
¹² 「キャンバスネイサン教区の古い教会が教区の名望家ハミルトンの利害から、教区のはずれ、クライド河畔につくられ、教区民の不満を買って結局、移転した」山崎 [1977], p.7. 「スキナーの形相はさすがに鋭く、物も言わなくなった」山崎 [1977], p.7.

北緯、55度、45分、58、西経3度、57分、3955.766,-3.960998 との情報によって接近できる。



<栄堂正面の壁面に確認できる「コルトネス」の文字>

スキナーの顔も険しくなったとされるものであろう。この場所は、人々の記憶からも取り残された、ステュアートに相応しい墓所である。何者に対しても平等に、かつ残酷にやってくる時間によって、おそらくはその形も急速に失われるのに相違はない。



<ステュアート家の栄堂>

次に、リカードとマルサスに関する場所を探索する。

5. リカードとマルサス

マルサス (Thomas Robert Malthus, 1766-1834) は、イギリス古典派でのリカードの論敵。『人口論』 (*An essay into the principles of population*, 1798.) によって大きな影響を残した。ケンブリッジ大学卒業後僧職についたが、東インド会社が創設した東インド・カレッジで経済学と歴史学の教授となった。リカードとの論争によって、互いに古典派経済学の彫琢を成し遂げ、同時に立場は変わっても変わらぬ親密な友情を継続した。彼は、ジャン・ジャック・ルソーのような啓蒙思想家と親交のあったマルサスの父親ダニエルが 29 歳の時、サリ州ギルフォードに至るドーキング Dorking 郊外に手に入れた農場に、ルッカリ Rookery と命名された邸宅で誕生した。¹³ ギルフォード Guildford ルーカーリー Rookery で検索<経度と緯度は、51.221227,-0.379635 >すると、豊かな森林地帯に遭遇するが、「グーグルマップ」で道をたどれば、下記のような邸宅を発見できる。



<ルッカリ、サリー>

リカード (David Ricardo, 1772-1823) は、スミスの労働価値論を発展させて古典派経済学を完成したとされる。ユダヤ系株式仲買人の子に生まれ、豊かな生活環境の中に育ったが、キリスト教徒の娘との結婚によって父と義絶、その後も父と同種の職業を営んで成功した。地金論争で経済学者としてデビューし、続く穀物法論争では穀物法反対の論陣を張った。多くの交友を持ち、マルサス、マカロック、トラワー、その他との手紙は、その理論体系の理解に資するとされる。主著『経済学及び課税の原理』 (*On the principles of political economy, and taxation*, 1817.) の公刊はジェイムズ・ミルの勧めによる。晩年はグロスタシャー (Gloucestershire) の地主として移り住んだが、ミルの勧めに抗しきれず代議士として国会に入り、議員として活躍した。早くから自然科学に興味を持ち、終生地質学会の会員でもあった。

彼は、突然の耳疾によって急逝し、バース近傍の Chippenham¹⁴、ハーニッシュ、セント・ニコ

¹³ James[1979], p.10

¹⁴ ハーニッシュもそうだが、チッペナムは、Cippa と言う名前の人物に関係する川の低湿地に由来するらしいが、難読地名の一例であろう。Mills[1991].

ラウス教会に葬られた。¹⁵

これは、発音が難しいが、〈ハーニッシュ Hardenhuish セント・ニコラウス教会、22 ハーニッシュ・レイン、チップナム〉



〈セント・ニコラウス教会、ハーニッシュ〉

で検索すれば、小さな教会ながら、該当する教会が見つかる。ドーリア様式のリカード記念塔は、教会の背後にひっそりと、しかし、存在感を残して存在している。¹⁶



〈リカード記念塔、教会裏〉



〈記念塔の足下にみえる「デイヴィド・リカード氏、国会議員」の文字〉

¹⁵ Sraffa[1973], p.12.

¹⁶ 古典様式のリカード記念碑に配置された、ニンフの足下に「デイヴィド・リカード氏、国会議員」の文字が見える。ハーニッシュ高校、セント・ニコラウス高校の二つの学校を見下ろす小高い丘の上から南を見下ろす景色は素晴らしい。最寄りの鉄道駅チップナムは難読地名の一つには相違ないが、ロンドン・パディントンからでは、彼が偶々移動図書館でスミスの『国富論』を手にしたと言う静養地パースのひとつ駅手前である。

6. おわりに

以上、いくつかの経済学史関係の場所を検索してみた。ここには記さなかったが、かなりの場所を探すのが可能である。マルクスのロンドン・ソーホーでの旧居<ディーンズ・ストリート>、1856年以降に転居した住居<グラフトン・テラス>、友人エンゲルスの住居など¹⁷はもちろん、変わったところでは、フランス社会学の創始者オーギュスト・コント (Isidore Auguste Marie François Xavier Comte, 1798-1857) が創始した「実証主義教会」を、ブラジル、リオ・デジャネイロに発見することもできた。¹⁸「グーグルマップ」は、ある程度の伝記的な情報があれば、地名探索の一つのツールとして有効ではないだろうか。



<人類教教会、実証主義教会、ベンジャミン・コンスタンチ通り、リオ・デジャネイロ、正面に「愛を原理とし、秩序を基礎とし、進歩を目的とす」とコントのモットーが書かれている。>

追記:本稿での人名に関する記述は、小林[1963]に依拠しているが、脱稿後、岩波書店辞典編集部編『世界人名大辞典』(2013年12月12日刊)を入手した。2刊本となって大幅に再録人名が増加して充実した内容となっている。本稿で対象とした人名についても念の為に急いで参照したが、ジェイムズ・ステュアートについての記述は「Steuart(Stewart, Sir James Denham 1712.10.21-1780.11.26 イギリス(スコットランド)の経済学者、エディンバラ大学に学び[1724]、弁護士となり、[1735]、のちヨーロッパの各地を旅行し[同-1740]、スコットランドに帰った。<ジャコバイト Jacobte >の陰謀に加わり亡命[45-63]、のち帰国して反逆の罪を許された[67(71?)]。重商主義の大家。【主著】経済学原理:An inquiry

¹⁷ ロンドンには、これまでいくつかの旧跡案内の書物が出ていて、併用すれば便利ではないかと思われる。例えばロンドンについては、Rennison[2009]や、Sumeray&Sheppard[2010]などがある。

¹⁸ 清水[1978]、199ページでは、「ベンジャミン・コンスタンチ通り74番地」となっている。ただ、現在の番地表示では必ずしもそうでないか、建築物の移転の可能性もある。リオ・デジャネイロ「ベンジャミン・コンスタンチ通り」には、positivist temple 実証主義教会<ポルトガル語では Igreja Positivista >とされるものが、写真のように実在する。また、「ベンジャミン・コンスタンチ通り」は複数あって、「グロリア」のそれ< Rua Benjamin Constant - Glória, Rio de Janeiro >と指定しないと、別の場所にジャンプする可能性がある。

into the principles of politiceconomy, 6(2?)巻,1767.] となっている。

せめて「グレート・ブリテンで最初に書物のタイトルに「ポリティカル・エコノミー」を採用した『経済の原理』を出版した」を付加し、彼の生年は、DNBを根拠とする記述が未だに割に見られるのだが、1713年の10月10日< Skinner[1998], P.Xiii >とすべきであろう。

参考文献

- (Chalmers, G.)[1805], *Anecdotes of the life of Sir James Steuart, Baronet*, in 6th Vol. of *Sir James Steuart's Works, Political, Metaphysical, and Chronological, of the late Sir James Steuart of Coltness, Bart...*, 6 vols, London.
- Darton, Mike[1990], *The dictionary of Scottish place names*, Moffat.
- Herman, Arthur[2001], *How the Scots invented the modern world, The True Story of How Western Europe's Poorest Nation created Our World & Everything in It*. New York.< 篠原久 監訳・守田道夫 訳 [2012]> 『近代を創ったスコットランド人：啓蒙思想のグローバルな展開』、昭和堂。
- James, Patricia[1979], *Population Malthus, his life and times*, London.
- 小林昇 [1963]、『経済学史小辞典』、学生社。
- Mills, A.D.[1991], *A dictionary of English place-names*, Oxford.
- Mossner, Ernest Campbell,[1980],*The life of David Hume*, Oxford.
- Rennison, Nick[2009], *The London Plaque Guide, 3rd edition*, Gloucestershire.
- Ross, Ian.S.[1995],*The Life of Adam Smith*, Oxford. <篠原久他訳 [2000] 『アダム・スミス伝』, シュプリンガー・フェアラーク東京>
- 清水幾太郎 [1978]、『オーギュスト・コント』、岩波書店。
- Skinner Andrew S.[1966], *An inquiry into the principles of political economy*, edited and with an introduction by Andrew S. Skinner, Edinburgh and London, 1966. lvi.
- Skinner, Andrew S.[1998], *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy A Variorum Edition*, edited by Andrew S Skinner, Noboru Kobayashi and Hiroshi Mizuta, in 4 vols, .
- Sraffa, P.,[1973] Biographical miscellany, 10th vol. of *The Works and correspondence of David Ricardo* in 10 vols. edited by Piero Sraffa with the collaboration of M.H.Dobb, Cambridge.
- Sumeray, Derek & Sheppard, John[2010], *London Plaques*, Oxford.
- 高橋大輔 [2001] 『ロビンソンの足あと』 日経 BP.
- 山崎怜 [1977] 「キャンバスネイサン」、『小林昇経済学史著作集V』 月報5、1977年12月.